

からかみせいさく 唐紙製作

平成 29 年 10 月 2 日 国選定保存技術

小泉 幸雄氏（大字大曾根）

唐紙は、和紙に雲母や絵具を用いて木版摺の技術で文様をつけた加工紙です。中国から渡来した「紋唐紙」を日本で模造して作ったのが始まりで、平安時代から和歌を書き記す美しい料紙として、また衝立や屏風、襖障子などの建具の一部として使用されてきました。近世以前の唐紙の使用は公家や寺院、高級武家屋敷に限られていましたが、江戸時代にその需要は町屋まで広がり、特に江戸で盛んに作られるようになりました。大消費地であった江戸には多くの人が生活しており、またしばしば大火に見舞われ、唐紙の需要は急増していきました。

唐紙は主に「京からかみ」と「江戸からかみ」に分かれます。京からかみは従来の唐紙製作の技法を受け継ぎ、手摺りによる加飾を主としています。一方江戸からかみは、江戸時代に京からかみから独自の発展をしたもので、自然の草木など季節感のある柄や、縞や格子といった粋な町人文化を反映した文様が、手摺りはもちろんのこと、刷毛を使って直接線を引く「引き染め」、型紙を使って文様を描く「渋型捺染手摺り」など、加飾の技法が自由で多彩です。

使用する絵の具の調整と正確な手摺りの技術を

持つとして小泉氏は高い評価を受けており、氏が製作した唐紙は、浜離宮恩賜庭園「松のお茶屋」、江戸東京たてももの園「高橋是清邸」、国宝「洛中洛外図屏風」、同「源氏物語関谷・滯標図屏風」などの修復に使用され、美術工芸品や建造物など文化財の保存に欠かせない材料となっています。



◎公開の有無：非公開